

オレ、側転したいねん —作業によって自己効力感が開花した一事例— I want to turn cartwheels!

—A case study of self-efficacy bloomed by occupation.—

○田中涼子 (OT), 太田篤志 (OT)
株式会社アニマシオンプレイジム

Key words: 発達障害, 運動機能, 自己効力感

【はじめに】今回、運動発達の未熟さと学業に困難さを持つ症例を担当した。当初は運動スキルの未熟さや運動に対する苦手意識が見られ、自己効力感の低下により否定的な発言が多かった。しかし小集団活動を通して運動に対して積極的な姿勢が見られるようになった。尚、本報告に際して本人と保護者より同意を得ている。

【目的】事例検討を通して、苦手な運動に取り組む中で生じた本児の自己効力感の変化と放課後等デイサービスで運動に取り組む意義について報告する。

【事例紹介】小学5年生男児。背臥位屈曲保持5秒など姿勢保持能力の未熟さがあり、巧緻動作も苦手である。情緒面も不安定で、学校でのトラブルも多い。今回は小集団での運動を通して体を動かすことの楽しさを感じ、能動的に活動に参加することを目的に作業療法介入を実施した。

【介入方法】X年12月に介入開始。隔週、1時間の療育で、介入当初は集団から離れ、作業療法士(以下OTR)が声をかけても舌打ちが多かった。活動に対しては最初から拒否し、仮病を使って逃げていたが、本人が参加したくなるまで待ち、安心できる場として認識してもらうように心がけた。すると徐々に自ら参加するようになった。初めて長縄跳びをする時も初めは拒否していたが、自ら活動に戻ってきて、床に置いたロープを両足跳びで越える練習をした。本人は失敗しても諦めずに10回跳ぶことができ「これならできるわ」と誇らしげだった。1か月後、仮病は30秒程で落ち着き、運動に取り組むようになった。療育で取り組んだ運動を自宅で練習するようになり、バンブーダンスに取り組んだ際には、床にカラーテープを貼り母と練習をした。2週間後、その成果を披露してOTRを驚かせた。「先生にできるようになったところを見せたいと頑張ったんです」と言う母親の後ろで、本人ははにかんでいた。2か月经過すると仮病もほとんど無くなった。苦手な体幹トレーニングも自宅で練習するようになったのだが、これは同じ小集団の仲間に追いつきたい気持ちが芽生えてきたためだ。「Aくんがやっていたから、オレも頑張る」と練習を重ねてフロントブリッジ10秒保持もできるようになった。このように自ら目標を立て、それを自ら達成してきた彼には少しずつ自信が生まれてきた。これまで日常生活でできなかった作業へ自ら挑戦するようになったのだ。「つま先立ちができるようになった」「みかんの皮がむけるようになった」と毎週のように報告してくれる。現在は友だちとの比較ではなく「あんなこともしたいなあ」という自分の願いを一つずつ実現させているようである。

【結果】背臥位屈曲保持12秒など運動スキルが身についてきたとともに「友だちに誘われて初めて休み時間にドッジボールをした」と社会面にも影響が見られた。母親に紐靴をねだり、蝶結びの練習も始めて、今は自慢の紐靴で学校へ行っている。そして「オレ、側転したいねん」と新しい夢も語ってくれた。運動に対して意欲的な発言が出てきたことが一番の大きな変化と考える。

【考察】利用当初は不得意な運動に対する防衛的な反応が大きかったが、本人に合う課題設定と共感的な対応により防衛的な反応は減少し、「受け入れられたい」という社会欲求から「認めてもらいたい」という承認の欲求、そして次の自己実現の欲求へとつながっていったと考える。この事例から、放課後等デイサービスの意義は、子ども自身が「ありのままがいい」と思うことのできる安全な場を保障し、一歩先の自分を自ら目指す環境を提供することにあると考える。そのためにOTRは、本人にとっての意味のある作業の提供と、子どもの良きパートナーとして見守り、必要であれば手を貸し、感情を共有して、子どもの願いを共に叶えていくことだと考える。